マリンサイエンスギャラリー「超深海」
2月22日（土）～5月11日（日）

県立中央博物館　分館海の博物館

1　超深海とは

深海は一般に水深200メートルより深い海を指します。この水深は植物や藻類が光合成に利用できる太陽の光が届く限界とされる目安です。これより深い海（＝深海）はほぼ暗闇の世界です。地球上の海のうち、水深200メートルより浅いところは地球上の海面面積の約20％程度であり、残りの80％は深海ということになります。

全ての海の平均水深は約3,800メートルです。水深200～1,000メートルまでは中深層と呼ばれ、この水深帯で水温・塩分が急激に変化します。水深1,000メートルを超えると、水温は２～３℃、塩分3.5％程度でほぼ一定となり、極めて安定した環境が続きます。水深6,000メートル（定義によっては6,500メートル）以深の海は「超深海」と呼ばれ、このような海はプレートが沈み込む海溝付近にしか存在しません。超深海が地球の海に占める割合は２％程度といわれており、ごく限られた環境といえます。最も深いのは太平洋のマリアナ海溝にあるチャレンジャー海淵で、その水深は約10,920メートルとされています。

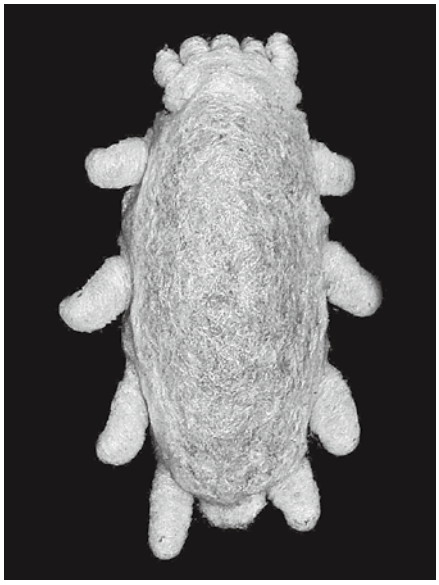
2　超深海に暮らす生きもの

いわゆる「深海生物」は水深200メートル以深に生息する生物を指しますが、一口に「深海生物」といっても、水深200メートルから1,000メートル程度に暮らす生物と、6,000メートルを超えるような超深海に暮らす生物では種類も大きく異なります。かつては超深海にすむ生きものはほとんどいないと考えられていましたが、調査が進むにつれて実際にはさまざまな生きものが暮らしていることがわかってきました。しかし、超深海は600気圧以上の水圧にさらされる非常に過酷な環境であるため、生きものを採集して調べる調査はとても困難です。そのため、どのような生きものがどれだけすんでいるのか、またどんな暮らしをしているのかなど、わかっていないことがたくさんあります。

3　展示と関連イベント

海の博物館で２月22日から開催するマリンサイエンスギャラリー「超深海」では、特に水深6,000メートルを超える超深海で見られる生きものにスポットをあてて紹介します。

本展示では、当館が調査に関わってきた日本海溝・千島海溝、琉球海溝、マリアナ海溝などで実施された超深海の生物調査によって得られた標本を中心に、約50種の生物の貴重な標本を一堂に集めて紹介します。３月８日（土）には学芸員による講座（要事前申込）を開催します。ぜひ楽しみにお待ちください。



クマナマコ（千島海溝水深7,250メートル）
体長約４センチメートル